

政善先生と吉野と飛鳥と

山城, 賢孝 / YAMASHIRO, Kenkou

(出版者 / Publisher)

法政大学沖縄文化研究所

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

沖縄文化研究 / 沖縄文化研究

(巻 / Volume)

22

(開始ページ / Start Page)

100

(終了ページ / End Page)

103

(発行年 / Year)

1996-02-01

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00002633>

政善先生と吉野と飛鳥と

山城 賢孝

初冬の吉野山の桜の木々は葉を散り尽し、枯枝だけが青空の中に耐えていた。観光客は勿論のこと、人一人通らぬ山路の静寂を破って政善先生と二人の足音は山の靈氣に吸い込まれていた。時は昭和四五年の十二月のことだから、二十余年も前のことになる。

吉野山の下の千本、中の千本を過ぎて、上の千本の小高い丘に来た時、政善先生は立ち止られて後ろを振り向かれて

吉野山 霞の奥は 知らねども 見ゆる限りは 桜なりけり

と口遊まれ、静かに目を閉じて、もう一度小さな声で繰り返えされた。それから「賢孝君私は、満開の桜の花や紅葉の吉野山は想像していたが、桜の葉っぱ一つない吉野山は想像さえしたことがない」、「君はどうして、枯木の吉野山を案内したのだ」と言われたので、悪かったかなと思ひ、一瞬悔悟の気持ちにさいなまれた。久し振りに先生にお会いできて、今の季節の最高の場所をご案内しなければいけないと思ひ吉野山にしたのに、これは失敗だったかと思つた瞬間、先生は「いやー実に素晴

しい。花よりも紅葉よりもこの枯淡の美しさはいい。こゝには日本文学の原点がある」と感動を繰り返されたので、ほっとすると同時に、ますます冬の吉野山が好きになっていった。枯淡の吉野山の感動を一つ一つかみしめつゝ、水分神社、金峰神社、西行庵などを散策した。とくとくの清水は、西行法師が隠棲していた時と同じく、静かにたゞとくとくと流れていた。冷たい真清水を手で結ばれて先生は飲まれた。「おいしい！」と言われて、又両手で掬われて飲まれた。

きりぎりす よさむにあきの なるままに よわるかこのゑの とほざかりゆく 西行法師

帰り道、私の乗用車の助手席の政善先生はいつもより言葉がはずまれた。しかし、いつもよく話しておられた琉球方言のことではなく、土地問題の頃の琉大学生の果した役割の偉大だったことも話され、純粋な学生たちを犠牲にした無力さを嘆いておられた。

米国が沖縄の土地を接收し、恒久的な軍事基地の構築を企んでプライス勧告を出した時、琉大学生会は決起して、沖縄県民の先頭に立って反対運動を展開した。恐れをなした米国政府は、米軍司令官ディフェンダーファーをして琉大学生の弾圧に乗り出し、活動家の退学処分を琉大当局に押しつけて来た。後で聞いた話だが、私や平山良明、上江洲朝康、伊礼孝などを含めた三十数名のリストをあげて退学処分を押しつけて来たと言う。しかし、これをはね退けて最少限の退学者に留め得たのは、実に政善先生のお力によるものだったと言うのに、先生はご自分のてがら話の一つもなさらずに、「自分の力が及ばなかった為に、六名の退学者と一人の停学者を出してしまった」と懺悔しておられた。

戦前戦中は間違った教育をして沢山の教え子を死に追いやった責任として、何度も学長の要請を受けながら拒み続け、一度も学長の地位につかれなかった政善先生は、学生たちの一つ一つの不幸まで覚えておられて、心を痛めておられた。大言語学者、大教育者であられた先生は、同時に人道主義者であり、偉大な平和主義者でもあられた。

車は吉野川沿いに下り、今木峠を越え、つらつら椿の巨勢寺を過ぎて飛鳥村に入った。黄昏迫る蘇我入鹿の首塚は、真神が原の田圃の畦道の枯草の中に空しく飛鳥風に吹かれていた。

大口の 真神が原に 降る雪は いたくな降りそ 家もあらなくに 万葉集

の歌のように、雪こそは降っていないものゝ、あたりには家もなく、人一人通らず、飛鳥風は肅々とたゞ肅々と吹くばかりだった。暫く歩いて、弥勒石のたゞずむ飛鳥川の岸边に出た。枯葦のそよぐ飛鳥川の縁に立たれた先生は、川の流れをじっとご覧になっておられた。長く続いた沈黙を破って先生の口をついて出た歌は

飛鳥川 瀬々に玉藻の 打ち靡き 心は妹に 寄りにけるかも 万葉集

二度繰り返されて、又流れの玉藻を見つめておられた。飛鳥川の澄み切った川瀬には美しい川藻が流れの方向に靡いていた。万葉人たちは、自分の姿を告白する時、現在の若者のように単刀直入で「あなたを愛しています」と言う軽薄な言葉は用いずに、実に奥ゆかしく、又目に見えるように具体的に「川藻が流れの方向に靡いているように、私の心はあなたに靡いています」と。万葉人の心が先生の

胸中に去来していたのでしよう。

この歌も二度口遊んでおられた政善先生の頬には、すっかりと夕闇が迫り、飛鳥風は、采女うねめの美しい衣の袖を反えずこともなく、たゞ空しく政善先生の頬を打っているのみだった。六十を少し出たばかりの先生の肌艶は、実に若々しく、飛鳥風の中に光沢を放っていた。その後も何度か先生を飛鳥にご案内した。柔和な笑顔と若々しい感動に溢れた先生の印象は益々深くなり、私もどんどん万葉集にのめりこんでゆくのであった。